
満月をさがして～再会～

ファリナ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

JのPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

満月をさがして～再会～

【Zコード】

Z6199Z

【作者名】

フアリナ

【あらすじ】

歌手を目指し、フルムーンとなつてデビューした少女、神山満月は死神一人、タクトとめること共に最後のライブを成功させようと頑張っていた。

しかし、タクトは生前の記憶を取り戻し、幽霊化が始まっていた。何としても成功させなければならない、満月の最後のライブ。三人は無事に終えることができるのだろうか？

ネタバレあります。あと、この話はアニメの最終回（一部）とその
オリジナル後物語です。

(前書き)

文章を書くのは苦手なので、おかしこじるかあると感心します。
それでもかまわない方はどうぞ。

「みんな一つ、今まで本当に、ありがとう……」

運命の日。

私の、フルムーンとしての最後のライブの日。

「最後に、私から歌を贈ります。Love chronicle『大好きな英知君のため。そして、大切な、ある人のために向けて』。

「タクトっ！まだダメっ！！消えちゃ、ダメよ……っ！せめてあの子の……満月の最後のライブが終わるまでは……っ！」
叫ぶうそ耳の少女、めろこ目の前には、黒いもやのよつたものに包まれ、苦しむ少年の姿があった。

幽霊化。

生前の記憶を全て思い出した、半人前の死神に起らる現象。

「タクト……っ……」

彼の身体は見る見るうちに黒いもやに包まれていく。
(守らなくちや……。タクトも、満月も。この、私が

『汚れたスニーカーの、解けた紐、結んでくれた』

私は精一杯歌うよ。

『はにかむあなたの笑顔、朝日を浴びてときめいた、急に』
タクト、めろこ、聴いてるよね？私の、最後の歌を

消えていく。少年の、体が

「嫌……っ！ダメ、タクト……っ……」

そして

「嫌ああああああああああああああああ……」

彼は……タクトは消えた。

残つたのは、タクトを包んでいた黒いもやだけ。

そのもやは動き出した。ステージの上で歌い続ける少女に向かつて。

「……せない」

彼女は言つ。満月を死に追いやる者に対して、叫ぶ。

「満月は絶対に死なせないっ！——命に代えてもっ！——」

『愛されたいから愛したいわけじゃない、真つ直ぐ。愛する勇つー？』

あと、少しだったのに……つ。

「めろこつー？」

歌いながら見上げた空に、めろこがいた。

あの黒いのは何だろ？……？

もしかして、私の命を奪いに……？

「満月、歌つて！！」

「で……でも……つ」

「いいから、歌つて！……あなたの歌が聴きたいの」

ライブを見に来ている観客が何事か、と驚いている。

それもそのはず。めろこの姿や声は私にしか見えないし、聞こえない。だから、上空から私を狙っている黒いものも、それを食い止めてボロボロになつているめろこの姿も、私以外には見えていないのだ。

「めろこ……」

「あなたは絶対に死なせないわ。私が、守るから」

「……」

私は頷く。

『……する勇気をくれたね……つ。これから旅に一人今誓つよつ。何があつても、この手離さない……ずっと』

再び歌い始めて終わるまでの間、私は泣いていた。

黒いもやと共にめろこが消えた。

きつとあのもやみたいなものは、幽霊化してしまったタクトだったのかもしれない。

歌の途中、あの一人が消えてしまつたすぐ後、観客がざわついているのが分かつた。私の姿がフルムーンから満月に戻るうとしていたのだろう。だけど、真実を知られることはなかつた。なぜなら、私の知らないところで死神であるいづみさんが手助けをしてくれたから……。

（ありがとう、タクト、めろこ、いづみさん……）

私、タクトとめろこに会わなかつたら、きっとこんなに幸せになることなんて出来なかつた。生きよう、なんて思わなかつた。

英知君、私、頑張つたよ。最後まで精一杯頑張れたよ。英知君に会いたい。今すぐ、会いに行きたい……。

だけどね、私は決めたの。生き続けようつて決めたの。私がまま言つてごめんなさい。でも決めちゃつたから。

だから、本当にごめんなさい。そして、ありがとう、英知君。

。

運命のあの日から、何日経つたのかな……。

タクトたちがいなくなつてからの私は、みんなが見ても分かるほど、元気がなかつた。

ライブの後、私はすぐに手術を受けた。

若王子先生のおかげで私は声を失わずにすんだ。

「……」

それでも私は喜ぶことが出来なかつた。

私は隣に置いてあるオルゴールを見る。

両親の、形見。

黙つて眺め続けていると、何かピンク色の物が見えた。

（あれつて……もしかして……）

「……めろこ？」

風の音に搔き消されてしまいそうな、小さな声で名前を呼ぶ。す

ると、オルゴールの後ろから小さなうさぎのマスコットが出てきた。それはクリスマスの日にめうにあげた手作りのマスコット。うさぎは動き出し、そして立ち止まって私を振り返る。まるで着いて来て、と言っているかのよつ。

気が付けば私は走り出していた。空飛ぶうさぎを追いかけて走つて走つて走り続けて。

信号に引っかかる。

乱れる息を整えながら、私は信号が変わることを待っていた。と、肩をマスクに叩かれ、

「めりー? ... ?」

うさぎは道路の向こう側を指差す。

何があるのだつ? とそう思しながら見ると、そこには。信号が変わると同時に私は駆け出す。渡り終えたといひで私は段差につまずき転ぶ。

早く呼び止めないと”彼”は行ってしまうつー。

『頑張つて、満月つ』

そんな言葉が聞こえた気がした。
めろこもきっと応援してくれてるはず。

「タク...ト」

座り込んだまま、”彼”的な名前を呼ぶ。
こんな声じゃダメ。。。
もつと大きな声で呼ばなくちゃ、気付いてくれない。。。
あ、勇気を出して。

「タクト

つ-----!」

あ……こんなに声出しても、苦しくないや。
本当に病気は治つていたんだ……つー

「……？」

田の前の彼は名前を呼ばれ、振り返る。

「タクト……っ！」

涙が出てくる。だつて、もう一度と会えないと思つていたから。

『よかつたね、満月。……お別れだね。さよなら』

何かが頬に触れた。

「……っ！？」

見えないけれど、私には分かる。

ここまで連れてきてくれた彼女が行つてしまつ、と。

だから私は叫んだ。見えなくても。伝えたい言葉があるから。

「めろ！」 つ！ ！ ありがと

！ ！ ！

目一杯叫ぶ。涙が溢れて止まらない。

絶対に忘れないよ。

めること過ごした一年を。

「たつた一つ、変わらないもの。ずっと描いてた夢」

「ご機嫌だな、満月」

「だつて、今日からフルムーン復帰なんだよ？」

「そうだつたな」

タクトと再会してから三年。私は十六歳になつた。
今までタクトの力で十六歳になつていたけれど、もう必要ない。

「ねえ、タクト」

「ん？」

「……好きだよ、タクト」

「なつ……」

彼の顔が一気に赤くなる。

「またお前はこつ恥ずかしいことをつー」

「えへへ～」

「えへへ、じゃねえ

つ！」

「あらあら、朝から元気ね。満月、托人くん」

私たちの会話に誰かが入ってきた。と思つたら、その人物は私のマネージャーである大重さんだつた。

「今日からまたよろしくお願ひしますね、大重さん」

「まつかせなさいつ」

『Hold me tight こんな想いなら、誰かを好きになる気持ち……知りたくなかつたよ』

「うん、相変わらず上手ね～、満月は」

「ああ」

私は再び歌手として活動することになつた。

最初、おばあちゃんにこの事を話した時、怒られるんじゃないかと身構えていたのだけど……。

「満月の好きなようになさい」

と、あつたり許してくれたのだ。

ついでにタクトも一緒に住めるようにしてくれた。

それが一番嬉しかつた。

『I love you 胸に込み上げる……。冬空に叫びたい、今すぐ君に会いたいよ……』

曲が終わる。今日のお仕事はこれで終わり。

午後はフリーなので、タクトと買い物に行くつもりだ。

「満月、お疲れ様っ」

「ありがとうございます、大重さん。ねえタクト、この後どこ行く

「ん……？」

買い物に行く、とは決まつていても、どこに行くのかまでは決まっていないらしい……。どうじゅつ……。

「満月、こんなのあるんだけど……行く?」

大重さんがポケットから一枚の紙切れを取り出した。

「それは……？」

「知り合いからもらつたんだけど、私も圭一さんも忙しいから…
…いる？」

私は彼女から紙切れをもらつた。どうやらそれは、遊園地のチケ
ットのようだ。

「あ、ありがとうございますー！」

「楽しんどいで」

「はいっ！ 行こっ、タクトっ！」

私は彼の手を引っ張りながら走り出す。

「お、おいつ、引っ張んなよ、くそチビッ！ー！」

タクトが怒り出す。だけど、私は気にしない。

今日は精一杯楽しもう。

めろこ……英知君……、私今、とつても幸せだよ？

四年目、タクトとめろこに初めて会つた時、余命一年つて知つて、
今の中に頑張らなくちゃつて思えた。フルムーンに変身して、コン
サートを開いたり、ラジオやテレビに出て思いつ切り歌つて……。
アメリカに行つて、英知君の死を聞いた時、私はもうダメだ、と
思つた。だけど、タクトやめろこ、それにライバルだった若松円さ
ん、それにいろんな人からはげまされて、歌うことが出来た。
今は、タクトがいつも隣にいてくれる。それだけで私はすく嬉
しくつて。

めろこ、英知君、私はこれからも頑張ります。

だから、月の上から私とタクトを見守つていてください。

また、一人に会えたらいいなあ……。

「おい、満月？」

私は立ち止まって空を見上げる。

そして、この空の上にいる二人を捜した。

「おーい、満月い？」

タクトが心配そうに私の顔を覗き込んでくる。

「なんでもないよ、タクト。……行こっか

「そうだよね。タクトは二人のこと、覚えてないんだよね。

「置いてくぞー」

「いつまでも立ち止まっていると、タクトが先に行っていた。

「待つてよ、タクトーっ！」

私は走る。彼を追いかけて

。

(後書き)

いかがでしたか?
よかつたら感想を聞かせてくださいね

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6199z/>

満月をさがして～再会～

2011年12月20日20時47分発行